第 2 回　早大ピアノの会
OB･OG 演奏会

2018 年マスコットアニマル　ぶた

2018 年 10 月 6 日

開場：12 時 40 分　　開演：13 時 00 分

新大久保　スペース Do

【第 1 部】　13:00 ~ 14:00

①	夢（ドビュッシー） 版画より第 3 曲「雨の庭」（ドビュッシー）

角田みなみ（33 代）

島根県からこんにちは。
懐かしく大好きなピアノの会での演奏、わくわくです。

ドビュッシー没後 100 年というメモリアルイヤーに乗っかりました。
曲のテーマは「水」ですが、なんだか 2 曲とも多感な思春期のようで、
私はジブリ「思い出のマーニー」のマーニーみたいだなと勝手に思っています。

皆さまそれぞれ色んなお気持ちでいらっしゃると思いますが、
これからの 10 分間は、どこか遠くの場所に来れたような、うきうきな気分で聴いていただけたらと思います！

②	銀河巡礼第一集「北半球の星空」より 7 つの楽想『プレイアデス』 第 1 曲、第 3 曲、第 4 曲、第 7 曲（シサスク） 月の光（パルムグレン）

高畑（関）麻莉恵（32 代）

シサスクは存命中のエストニアの作曲家です。
昨年、ミスター阿修羅が演奏しているのを一聴して気に入ってしまい選曲しました。
パルムグレンは比較的有名ですが、おおよそシベリウスと同時代のフィンランドの作曲家です。
「月の光」というとドビュッシーのものを連想する人が多いかもしれませんが、
この曲はかなり暗く、月の「光」よりも、それによって生み出される陰影が強調されているようです。

眠ってしまいそうな選曲ですが、どうぞごゆっくりお聴きください。

③　コンソレーション第３番（リスト）

船津理香（17 代）

数あるリストの曲の中で、比較的自分でも弾けそうな曲かなぁ、と、以前から楽譜だけは購入し、長年憧れていた曲です。日本では「慰め」とも呼ばれているようです。
なぜ、自分が、この曲にこんなに惹かれたのかは分かりませんが、きれいで大人っぽくて上品、な感じが魅力だったのだと思います。この曲は、精神世界を描いているような、とても繊細で、それでいて穏やかで、色で言ったら水色と言った感じです。それでドレスも水色を選びました。（笑）私は譜読みがすごく遅いのですが、２年前ぐらいから練習を始めて、いつの間にか弾けるようになっていました。やれば出来るんだな、と、この経験を通して思いました。

福島で生まれ育ち、言葉には未だに訛があってよく指摘されます。(笑）７年前、横浜にマイホームを建て、平凡ながらも幸せな暮らしかなぁ、と言うところです。普段は、主婦業の傍ら在宅でデザインをしています。子供も小５と小２になり、だいぶ自分の時間も取れるようになってきました。2014 年には青山で個展も開催したものの、最近創作は停滞しているので、秋からは再開したいところです。

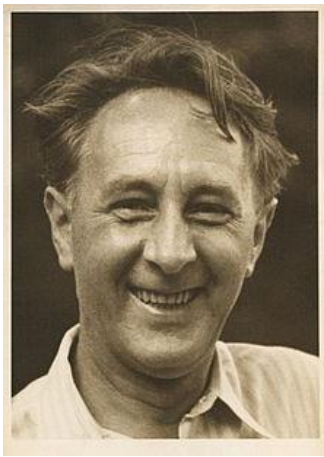
早大ピアノの会では、本当に貴重な友人たちに恵まれ、楽しい時間を過ごしてきました。学生時代の繋がりは人生の財産ですね。
今日もこのようなコンサートに参加させて頂き感謝しています。なるべく大人っぽく、そして、心を込めて演奏したいと思います。この曲の世界観を、自分なりの表現で皆様にお届け出来たら幸いです。☆

④　ピアノ・ソナタ第１番　H. 350　第１楽章・第３楽章（マルティヌー）

加藤喜市（27 代）

27 代 OB の加藤喜市と申します．第一文学部（哲学専修）出身．母校である早稲田の文学部・文化構想学部ほか，いくつかの大学で講師をしています．

ボフスラフ・マルティヌー（Bohuslav Martinů, 1890-1959）はチェコ出身の作曲家で，ピアノ・ソナタは 1954 年の作品．全三楽章構成のうち，今回は時間と練習の都合上，第１楽章・第 3 楽章のみ取り上げる．以下，YouTube にこの曲の音源をアップロードしている方による，曲目解説を引用する（試訳）（https://www.youtube.com/watch?v=kQbNJjj8mlk）．



「マルティヌーのピアノ・ソナタ第１番（彼の唯一のピアノ・ソナタ）は，マルティヌーのピアノ独奏曲としては最大規模の作品である．交響曲第 6 番の直後に書かれており，ルドルフ・ゼルキンに献呈されている．第一楽章にはブラームスのピアノ・コンチェルト第 2 番，第二楽章にはラフマニノフの 2 番目のコンチェルト〔の主題〕が埋められているのを聴き取ることができる．全体として重苦しい曲調で，厳粛な雰囲気が支配している．

このソナタは彼の後期の重要な作品であり，形式的な自由・劇的な緊張・（通常のマルティヌーよりも）きつい不協和音といった特徴をもっている．また度重なる拍子の変化も特徴的である．最終楽章においては，彼の交響曲　第 6 番冒頭に出てくる虫の羽音が，ブラームスの 2 番目のコンチェルトの幻影とともに聴こえてくる．スイスにある自宅で作曲者自身にこの曲を演奏した後，作曲者の助言を受けて，ゼルキンが，1957 年にデュッセルドルフで初演を行なった．このピアノ・ソナタは「ルドルフ・ゼルキンに」献呈されている．」

⑤　ソナタ第 15 番「田園」第 1 楽章・第 4 楽章（ベートーヴェン）

中野花恋（35 代）

穏やかさの中に情熱を感じられるこのソナタは、大学時代に唯一弾き残してしまったと悔やんでいた曲です。今回こうして皆様の前で弾く機会に恵まれ、とても感謝しています。
今回弾くのは第 1・4 楽章のみですが、第 2 楽章も素敵なので聴いてみて下さい。
1 年半振りの舞台であがり症に拍車がかかっていますが、安全運転で頑張ります。

【第 2 部】　14:10 ~ 15:10

⑥　オラトリオ「キリスト」より「飼い葉桶の羊飼いの歌」S.498b/1（リスト）
オラトリオ「キリスト」より「輝きの聖母は佇み」の断片（リスト）

森田亮介（29 代）

■序　フランツ・リスト、社会、私たちを正しく理解するために

僕が今回 OB 演奏会を企画して、今回の曲を選んだのは、この解説を届けたかったからである。つまり、ピアノ演奏よりもこの解説のほうがメインのエントリーであるので、ぜひとも読んでいただきたい。できるだけ簡潔にまとめようとしたせいでいささか理解しにくく、しかもそれでもやや長文になってしまった。日本においてはリストの解説書というのは非常に少ない。そして本稿のように思想的、社会的な視点からフランツ・リストの分析を試みた一般書は多分ない。ただ、お読みいただければフランス革命の実際と近代までの思想の根幹を把握できるとともに、それによってはじめてフランツ・リストを真に正しく評価できるようになること間違いなしである。そしてそれが、現代日本をどのように生きるかということについても何らかの緒を与えてくれるものと信じている。

■リストの所業と最高傑作「キリスト」

フランツ・リスト（1811～1886）はとても膨大な作品を残した作曲家である。レスリー・ハワードというピアニストがフランツ・リストピアノ曲全集というのを出している。その全集の下記データを見ればそれがどれほど途方もないプロジェクトであったかということがわかる。

・最初の録音が 1985 年 10 月 24 日、最後が 1998 年 12 月 18 日の 14 年を要した。（当初予定の最終巻は 57 巻）
・全 57 巻ＣＤ95 枚、ＣＤ一枚あたり平均 75 分録音、延べ 117 時間、1377tracks。2010 年までに新発見の楽曲について追補収録され、最終的に 99 枚になった。
・楽譜 16000 ページ＝12 マイル（紙の幅だと計算が合わないので、２段楽譜の総延長と思われる）で、9 百万か 1 千万の音符を叩いたことになる。

一般に、クラシックに親しんでいる人が考えるリストの最高傑作といえば、ロ短調ソナタとか、メフィスト・ワルツ、最高傑作と言わなくても、愛の夢第 3 番、超絶技巧練習曲、ハンガリー狂詩曲 2 番とか 12 番、スペイン狂詩曲、ダンテを読みて、エステ荘の噴水などが割と名曲として評価を受けている。しかし、リストピアノ曲全集に挑んだ当のハワードは、あろうことかピアノ曲ではない、オラトリオ「キリスト（Christus)」を挙げたのである。なぜこのような超マイナーでキワモノ、珍品な楽曲が最高傑作なのかと憤る人もいるかも知れない。しかし、その疑問に答えるには、当時のヨーロッパの思想や社会情勢、宗教と国家の関係およびそれらに対するリストの評価、それまでの活動などを総合的に検討しなければならない。その解説は後半に譲り、まずは「キリスト」について紹介する。

「キリスト」は、1862 年から 1866 年にかけて作曲された。キリストの生誕から復活までの主要なエピソードを第 1 部「クリスマス・オラトリオ」、第 2 部「顕現のあとで」、第 3 部「受難と復活」に分けて 3 時間に及ぶスケールで描いたオラトリオ作品。合唱のテキストの大部分はラテン語聖書から採られている。オーケストラ、オルガン、合唱という編成の大きさ、3 時間という楽曲自体の規模のために、世界で 10 年に一度演奏されるかどうかという作品であるが、彼の 1500 近くある作品の中で間違いなく最高傑作で、リスト自身も「これは私のすべてを注いだ遺作である」と述べている。

リストはこのオラトリオから第 1 部から「序曲」、「飼い葉桶の傍らの羊飼いの歌」、「東方の三賢者の行進」、第 2 部から「奇蹟」の計 4 曲についてピアノ独奏版を遺している。

■クリスマスの夜の遠足

「飼い葉桶の傍らの羊飼いの歌（Hirtenspiel an der Krippe）」は、第一部「キリストの誕生―クリスマス・オラトリオ」の 4 曲目にあたる（原曲はオーケストラのみで合唱は入らない）。聖書というと堅苦しい印象もあるが、タイトル通りのパストラーレ（牧歌）とコラールである。彼の晩年の曲集「クリスマスツリー」にも同じタイトルの楽曲があるが、全く別の曲である（「東方の三賢者の行進」も同様）。

キリストが誕生する物語はルカの福音書に記されている。戸籍登録のために故郷ベツレヘムまで戻った際、マリアが産気づき、宿は満室だったので馬小屋でイエスを生む。その夜、羊飼いたちのもとに天使が現れ、「あなた方を救う子がお生まれになった」とお告げを残し、羊飼いたちが一目見ようとその小屋に向かう…。赤子イエスにまみえて、祝い歌を歌い、嬉し泣き、希望に満ち満ちた心で家路を辿り、眠りにつく前にもう一度喜びを反芻する。そんな羊飼いたちの夜の遠足がすこし愛らしく奏でられる。

当時の羊飼いは決して高貴な身分ではなく、ほとんど被差別民のような待遇であったとも言われている。この曲を初めてしっかり聴いたとき、虐げられた人びとの、魂の救済をもとめる歌声が、こんなに朗らかで美しいものなのかと、大変驚かされた。また、聖書の物語では、東方の三賢者がイエスに会いに来るのに先駆けて、天使は羊飼いたちにイエスの誕生を知らせる点は、キリスト教が弱者のための宗教であることを強調するものであろう。

第 1 部は羊飼いの歌の後、「東方の三賢者の行進（Die heiligen drei Könige）」がオーケストラで奏でられ、幕を閉じる。

※ルカの福音書　第 2 章（1-20）

2:1 そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。
2:2 これは、クレニオがシリヤの総督であった時に行われた最初の人口調査であった。
2:3 人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。
2:4 ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、
ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。
2:5 それは、すでに身重になっていたいいなづけの妻マリヤと共に、登録をするためであった。
2:6 ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、

2:7 初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。
2:8 さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。
2:9 すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。
2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。
2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。
2:12 あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。
2:13 するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒になって神をさんびして言った、
2:14「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。
2:15 御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。
2:16 そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。
2:17 彼らに会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。
2:18 人々はみな、羊飼たちが話してくれたことを聞いて、不思議に思った。
2:19 しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。
2:20 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。

■輝きの聖母は佇み

「輝きの聖母は佇み（Stabat mater speciosa）」は第一部「キリストの誕生―クリスマス・オラトリオ」の 3 曲目にあたる。原曲は 15 分弱のオルガンと混声合唱で、ピアノ独奏曲としての編曲は残されていないが、重要な楽章であることと、あまりにも美しい曲なので、特に情愛のこもった 1 フレーズを抜き出して紹介することにした。該当部分の歌詞は下記の通り。

facme nato custodire,
どうかこの初子が私を守ってくださいますように。

Verbo dei praemunire,
神の言葉が私をたくましくしますように。

conservari gratia.
神の祝福が私を救ってくださいますように。
（※くりかえし）

今ふり返ってみると、まだ子どもで、父、母が自分と世界の全てだったころ、本当に輝いてみえた。しかし、歳をとって親と対等な関係に近づいたり、喪ってしまったり壊れてしまったり、そして社会のしがらみを知ると、衰えた背中にあまえることは、もうできなくなる。それは自分で物事を判断して、一人で生きれるくらい強くなったことの証明だから、悪いことではないと思う。それでも、あの大きな腕と胸にもう一度抱きしめられたいとか、ぬくもりをこころいっぱいに感じたいと、いつまでも願っていたいものである。

原曲ではシンプルな和音で恐ろしく清潔な旋律が続いた後、1 分間だけこの慈愛のメロディーが挟まれて、最後に宇宙的な響きとともに「アーメン」を唱えて終わる。有名な愛の夢第 3 番は隣人愛（博愛）を歌っているが、慈愛こそ世の中に真に必要なものだったのではないかというリストの主張が表れていよう。

■間序

では、その慈愛を唱えることがなぜ重要であるかについて検討していく。そのためにまず、19 世紀フランスを席捲したサン＝シモン主義に対する知識と理解が不可欠である。ハンガリー出身であるがリストの活動の中心はフランスであり、また、リストは 20 代の頃からサン＝シモン主義に傾倒していたからである。

クロード・アンリ・ド・サン＝シモン（1760～1825）は今日の様々な社会思想・社会科学の源泉ともいえる。彼の到達点たる『産業者の教理問答』(岩波文庫,白 224-1) は学術論文ではなく平易な Q&A 形式で、4 分冊になっている。ただし、弟子のオーギュスト・コントが執筆している第 3 分冊だけは論文調で書かれ、サン＝シモンは激怒している。そうはいっても全体としては一般労働者にも理解が可能な水準で、いわばオルグ本、アジ本とも言えよう。そして「すべての富を算出しているのは産業者である」、「産業者は、彼らを被治者の階級から統治者の階級に移させるに違いない社会組織への移行を行うための、何物を持ってしても抗しがたい諸手段を与えられてい

る」など、非常に戦闘的、革命的な響きを持った言葉が魅力的である。以下、彼の説くサン＝シモン主義の経緯と概要を見てみよう。

■サン＝シモン主義（＝産業主義）の概要

言うまでもなく、19 世紀のフランスは、帝政と共和制が幾度も入れ替わるような、非常に不安定な時期であった。1789 年のフランス革命によって、確かに宗教的権威と国家体制は分離した。しかしフランス革命はブルジョワ革命であり、現代に比して不十分で過渡的な民主政であった。具体的には議会議席を占有し、国家予算の管理権、国家財政権（歳出・課税を含む）を実際に握っていたのは未だ軍人や貴族、ブルジョアであった。

産業者とは社会の様々な成員たちの物質的欲求や嗜好を満たさせる物的手段を生産したり、それらを彼らの手に入れさせるために働いている全ての人々のことを言う。この時代のフランスはまだ産業革命の緒についたところであり、つまり、産業者とは農耕者、大工、蹄鉄工、リンネル・カシミヤ・帽子・靴の製造者、商人、荷車引き、水夫といった、ごく一般人のことである。一般人は、未だ革命の恩恵を受けておらず、個人として尊重されていなかった。

サン＝シモンはまず、産業者階級が存在しなければ、他のどの階級も存続し得ないので、彼らは社会の中で最高位の地位を与えられなければならないと考えた。そして、産業者は経済的存在であるから財務管理能力もあるはずである。にもかかわらず、産業者を代表しない統治者の利己的で無責任な予算・課税により不必要な負担を強いられ、産業・営みを圧迫干渉されているのは不合理であるから、産業者の代表が国家財政権を保持して産業圧迫を防止すべきである（消極国家の実現）。また産業は万物の富を生み出すのであるから、これを奨励し促進するような政治体制が組織されるべきである（産業主義の実現）。

サン＝シモン主義はどのようにして達成されるべきか。そのような国家体制の変革、産業者の国家財政権獲得は、産業者が最高位の階級であることを国民が認識し、それを支持する学説の登場、世論の成熟を待って実現されるのであって、革命によってではない。革命は現体制を駆逐することはできるが、新しい体制を作り出すことができないという意味で、達成することは不可能である。

一方で、産業、資本主義は自ずから富の偏在、格差を生み出すことは否定できず、その弊害を是正するためには、産業者は「人間は互いに兄弟として振る舞うべし」と

いうキリスト教の主要な原理に従って、あらゆる手段を用いて貧しい人々の精神的・物質的生活をできるだけ速やかに改善しなければならない。

この概略的記載のみでは、キリスト教の働きはとってつけたような印象を与えるかもしれない。また、このキリスト教による修正が『産業者の教理問答』とは別に『新キリスト教』(1825 年) として刊行されたということも補足的印象を与えている。しかし、上記岩波文庫の解説では「もともとサン=シモンは産業体制を構想するときに道徳の役割を軽視してはいない。合法的、平和的に、そして個人的利益を抑えて多数者の利益を支持するという産業者のあり方自体が、道徳なしには不可能だろう」と指摘され、それが尤もであると思われる。

■サン＝シモン主義がパリ・ヨーロッパに与えた影響

サン＝シモン主義は当時の文化人にも大流行した。ショパンの恋人のジョルジュ・サンド、詩人ユゴー、大作家ゲーテ、そしてリストなどが著名である。また、フランス革命後、その権威を失いつつあったカトリックの僧侶にも支持者がいた。リストは神父ラムネーからサン＝シモン主義を教わった。ただしローマカトリックはサン＝シモン主義に否定的である。それはサン＝シモン主義が王政は肯定しつつも、王権神授説に基づく封建制度自体は否定するものだからである。

サン＝シモン主義は、ロックやルソーらの説いた自由、平等という自然権思想哲学から労働の価値、私有財産制、民主政を導くのではなく、産業者や一般労働者が歴史的に培ってきた社会経済的重要性に着目して論理を組み立てる実証主義 (観察に基づいた考察をすべきとの立場、つまり科学的アプローチ) に立っている。哲学も実証的に構築されるべきであるというのがサン＝シモンの主張である。人間の知識は神学的段階 (虚構の段階)、形而上学的段階 (抽象の段階)、科学的段階 (実証の段階) という三段階で発展し、実証によって裏付けされた思想があることではじめて新しい社会体制を構築することができる。『産業組織論』の産業について語った部分で、彼は「あらゆる社会制度は哲学体系の応用である。したがって、制度に対応するはずの新たな哲学体系をあらかじめ確立しておくことなしに、新たな制度を設けることは不可能である」と説いている。なるほど、フランス革命は宗教に権威づけられた王権を否定し、民主政という新たな制度を実現したように見えるけども、実際にはローマ教皇とフランス政府の間で政教条約 (1801 年、コンコルダ) が結ばれて、国家予算から宗教者への俸給がでたり、司祭叙任権は教皇が持っていたりと、国家から完全に宗教権力が分離したとは言えない状況であった。革命当時は実のところ、自然権思想は政教分離に

ついて十分な検討ができていなかった（現代でも完全な分離を正当とするだけの理論を生み出せていない）。サン＝シモンの主著『産業者の教理問答』の冒頭部分で、彼は理念達成のための方式として革命を否定しているのだが、「旧体制をただ否定するだけの革命では新しい社会体制は達成し得ない」と主張する根拠は自然権思想自身にも議論が不十分な点があったからかもしれない。

ただ、サン＝シモンは政教未分離による混乱やブルジョアだけの民主制について良いとも悪いとも言わず、特に民主政の混乱については単に「過渡期」であると説明した。ざっくり言えば、彼は「王権も民主政も、産業主義実現へのアプローチの道具としては利用できそうだ」という立ち位置である。市民革命以降、自由主義に進んでいく時代に王政を排除しない主張が流行したというのは少し不思議に思われるかもしれない。しかし、当時の人々にとっては、平等や自由の価値の徹底よりも、とにかく安定した国家体制、平安のほうがよっぽど重要だったのである。このような社会的な事実からも、革命という方式は否定されうるだろう。

では、革命によらずに国家体制の変革、産業者の国家財政権を獲得するための方策について、サン＝シモンはどのように展開したかといえば、産業者が最高位の階級であることを国民が認識し、それを支持する学説の登場、世論の成熟を待って、国王に「産業者が最高位である」ということを宣言してもらえばブルジョアに支配された議会も反対できず都合がよい、と説いたのである（第一分冊）。つまり国民と国王が対等な関係にたち、いわば新たに win-win な社会契約を結ぶことで達成されるとした。産業主義はこのように国民の総意に基づく国王が主権を持ち、第 1 階級たる産業者の代表が国家財政権を把握し、国民≒産業者を奨励する体制を志向するものである。よって、民主政や人権の絶対性は最終目標ではない。「平安を脅かす革命の否定」と「国民の地位向上」との同時達成を目論んだサン＝シモン主義は、当時の世論にベストマッチだったと言えよう。そのような主張であるから、「自由権や平等権は神から与えられ、王といえども侵すことはできない」というふうに人権の価値を絶対的に肯定するまではいかないけども、「それらがあったほうが経済発展や産業主義の実現に便宜である」という程度には支持し得た。同時に、宗教的権威に基づかない王権の樹立というのは、カトリックがこの思想を拒否するのに十分な材料であった。

サン＝シモンの実証主義アプローチは、彼の一時の弟子のオーギュスト・コントに継承され、のちに社会学が確立された（先に登場した知識の三段階発展論はサン＝シモンとコント共通の発想である）。このように、自由、平等という人権を至上のものとせず、科学的観察に基づいて社会全体の課題（サン＝シモン主義においては「産業

の発展」という課題）を解決のための国家体制を志向する立場は、広い意味で社会主義と言っていいだろう。

また、社会主義と聞けば、多くの人は共産主義やカール・マルクス（1818～1883）、ロシア革命（1917）といったワードを連想するのが自然だろう。しかしサン＝シモンとマルクスの主張は全く異なる。先述のようにサン＝シモンは科学に裏付けられた哲学がなければ制度というものは存在し得ないとしているのだから、国家体制や社会のあり方というのは、哲学や科学、道徳、信仰つまり精神的なものを基盤としているという考え方（精神論）をしている。そうであるからこそ宗教を理解することによって社会制度そのものを修正し、経済学的弱点を克服できると考えたのである。

一方でマルクスは『経済学批判』で唯物論を明確に主張している。法律的、政治的な構造の基盤となっているのは（生産関係の総体からなる）経済的なメカニズムである。このメカニズムとは、人間の精神とは関係のない「モノ」であり、人間の意識はモノに支配されている。だから、優しい性格で宗教をよく理解しているとか神を深く愛しているからといってみずから社会制度を修正することは絶対に無理だということである。ただ単に、生産関係にひずみが生じれば革命が自然発生し、共産主義へと移行していく。精神と物の二元論がマルクスの考え方である。

■サン＝シモン主義が克服できなかった問題

サン＝シモン主義はフランスやドイツなど、イギリス以外のヨーロッパ諸国における産業革命の発展に寄与した。特に、サン＝シモン主義の熱烈な支持者であったルイナポレオン（ナポレオン 3 世）は、まさにサン＝シモン主義の忠実な実践者であった。1848 年にフランス第二共和政で大統領となったナポレオン 3 世は 1852 年のクーデター騒ぎを利用して選挙で王政を復活させ皇帝になった。自由帝政期（1860 年ごろ～1870 年）においては、パリ改造計画、鉄道網整備、信用制度に基づく近代金融の確立を実現した。今も残る流麗な町並み、張り巡らされた鉄道網、ロスチャイルドの繁栄をみれば、その思想の威力はまったく恐るべきものである。

しかし、産業主義はやはり問題を抱えていた。産業革命により高度に発達した資本主義社会では産業者が資本家階級と労働者階級に二分され、格差が拡大した。貧富の差は事後的に修正されるのみで、人権的保障は産業主義に常に劣後するところ、サン＝シモン主義において求められる財政管理能力は「安価な統治の実現」という一点のみに特化している。この性質からすれば、社会的な慈善事業への支出は安価な統治とは言えない。また、大型の公共事業を行うために大量の国債が発行され、それを償還

しなければならない。このように慈善事業の事後的性質、安価な政府志向、財政の硬直化などの要因により、格差是正は一層困難となった。

また、ナポレオン 3 世が大統領になる以前であるが、1830 年代にはフランスの主要な都市で労働者による反乱が複数勃発している。『産業者の教理問答』は 1823 年に出版され、広く読まれていたにもかかわらず、サン＝シモン主義者でさえ、1830 年代の反乱を支持している。これはやはり、経済構造の変化が労働者たちに反乱を起こさせたのであり、生産関係が人々の精神を支配していることの証左ではないだろうか。

■マルクスの修正

これらの問題を克服するために、マルクスは所有について私有財産を一部修正し、富の生産（いわば企業活動）における私的所有を制限し、労働者が市場に投入した労働力の量に応じた正当な対価を受ける体制を志向した。この主張を肯定すればロシア革命が起こっていくという事になったし、否定するとしてもワイマール憲法において労働権といった社会権という人権カテゴリを創設することになっていく。

■リストの修正 1　革命的闘争は肯定される

リストはサン＝シモン主義とどのように向き合ったか。まず、芸術家・音楽家も産業者の部類に属するので、リストはまず自分自身と芸術家という職業の地位向上に努めた。それが超絶技巧であり、リサイタルであり、交響詩である。超絶技巧はリスト本人を芸術家として承認させた。そしてリサイタルでは彼は自作曲だけではなく、当時の様々な作曲家音楽家たちの作品をピアノ曲にアレンジし、ヨーロッパ中の演奏旅行で紹介した。リサイタルの中で各地の音楽を取り上げることで、ヨーロッパの人々にとって音楽を身近なものにする媒介者として機能した。

リストは 1848 年にパリを中心としたピアノ演奏活動から一度退く。ワイマールの宮廷楽長に就任したのである。ワイマールは J.S バッハが活躍した街であり、ドイツ古典主義の文化的中心地であった。しかし、ゲーテ（1749～1832）が没した後、高名な芸術家が現れず、その役割を失っていた。そこでアレクサンダー皇太子と皇太子妃が、リストを呼び込んだのである。かねてから自由に動かすことができるオーケストラを欲していたリストにとっても良い提案であった。またリストはこの芸術都市を再興することは芸術家としての使命とも考えていた。であるからこそ、報酬面ではかなり不安定であるにもかかわらず、リストはその職を受け入れるのである。そして、超

絶技巧練習曲、愛の夢、詩的で宗教的な調べ、ファウスト交響曲、メフィスト・ワルツ、バラード、演奏会用大独奏曲、ロ短調ソナタ…などなど、今日知られているリストの代表作の大部分は、このワイマール時代に作られたものである。

また、リストは芸術について、絵画、文学、音楽、彫刻いかなる形態であっても呼び起こされる感動は同じものであると捉え、物語を読んだ後の感動、絵画を見たときの感動を音楽によって再現できないかと考えた。それが交響詩（symphonic poem）の開拓である。そして、彼が作った 13 曲の交響詩には、芸術の尊さが人々の心に感動を呼び起こし、魂を鎮め、争いがなくなることを目指し、芸術が平和に貢献するようにという願いが込められている。このことは交響詩第 4 番「オルフェウス」に宛ててリスト自身が言及している。交響詩第 11 番「フン族の戦い」（1857 年）は、キリスト教西ローマ帝国率いるヨーロッパ諸民族が異教徒フン族をやっつけるエピソードであり、戦を鼓舞し、カトリックを権威付けている。このあたり、平和の基礎にキリスト教観があるべしというサン＝シモン主義的主張が見られる。

しかし、リストは革命に繋がりうる闘争を必ずしも否定していない。リストは 1830 年代の労働者たちの叛乱に対して肯定的である。この観点で、彼の楽曲の中で知っておきたいのが、「リヨン」（Lyon,1834）である。これは、巡礼の年第 1 年の元となる「旅人のアルバム」という曲集の第 1 曲である。当時の労働者たちは、首領貴族への貢納とブルジョア民主政への税負担という二重の搾取のもと、まったく非人間的としか言いようのない生活を強いられていた。そのような中、1831 年にフランス第 2 の都市リヨンで 4 万人の絹織物工が立ち上がり闘争を繰り広げた。その程度は単なるストライキの域には収まらず、労働者たちが数日間市政を掌握したほどの激しい闘争だった。リストは無産階級による搾取の現状の悲惨さに衝撃を受け、同時に貧しい労働者たちの生の闘争に激しく心を動かされ、1834 年に「リヨン」を作ったのである。自筆譜には冒頭に、労働者たちの「労働に生きるか、闘争に死ぬか」というスローガンが刻まれている。それに加えて、1837 年には現地に赴き、労働者たちのためにチャリティーコンサートまで開き、彼らを応援したのであった。

そして、その「リヨン」に酷似したメロディーは、最晩年に作られた交響詩第 13 番「ゆりかごから墓場まで」（1882 年）の第 2 楽章は「生の闘争」において登場し、バーバリズムなリズムと全音階が俗なるものを描いている。このことから、1880 年代まで、リストは闘争を肯定する点において、純粋なサン＝シモン主義とは異なる立場であり続けたと言ってよいのではないだろうか。そうあったのは、ワイマールにいた事も影響しているだろう。フランスが自然権思想で天賦人権論、法の下の平等という

観念を有していたのに対して、ドイツは法実証主義の考え方が強い。人間は神から完全に自由であることが望まれるという建前のもとで、人の作る法と神の宗教的倫理・道徳とは分離されるべきであるという考え方である。ワーグナーの楽劇 4 部作「ニーベルングの指輪（ラインの黄金、ワルキューレ、ジークフリート、神々の黄昏）」を観ればこの考え方がはっきりとわかる。キリスト教観の通底するサン＝シモン主義において否定される革命も、人が神から完全に自由であれば肯定されうる。

■リストの修正 2　博愛を作るものは慈愛である

1866 年 7 月 30 日、リストは聖職者として叙階を受けた。この事実は、時たま彼のことを「メフィストーフェレス神父」などと表現したりするなど、現在でも有名である。ただ、その位はミサなどの式典を司ることのできない下級聖職者である。どうも、それ以上のカトリック的権威は邪魔になるとさえ考えていたきらいがある。なぜならリスト自身、一人目の女性マリー・ダグーと訣別した後、新たな女性カロリーヌとの結婚を希望していたが、カロリーヌは既婚者でありカトリックから離婚が認められず、ついに望みは叶わなかったというように、カトリックの規律に苛まされた当事者だからである。さらに後年、マリー・ダグーとの間に生まれた娘コージマ・リストは、かのワーグナーと結婚するに際して（厳密には前夫ハンス・フォン・ビューローと離婚するに際して）プロテスタントに改宗することになり、そこでまた宗教的な軋轢が生じる（1867 年～1872 年の間、リストとワーグナー夫妻との関係は文通も途絶え絶縁状態に陥る）など、カトリック信奉は必ずしも彼の幸福追求に貢献しなかった。少なくとも、ローマ教皇を頂く封建体制には辟易としていたことは事実である。よって、「音楽は本質的に宗教的性質を有する」と主張していたリストであるが、同時に封建的カトリックから解放されるべき必要性を痛切に感じていたのである。この点はサン＝シモン主義の思想に合致しているとみられる。

そして彼は宗教音楽の改革に参加することとなる。その改革は音楽の守護聖人チェチリアの名前をとってチェチリア運動と呼ばれ、リストはグレゴリオ聖歌のみに基づく教会音楽の正典の確立、普及のために現代記譜法によって出版すること、といった改革案を 1859 年に提示している。またグレゴリオ聖歌の教会旋法による和声づけについても重要性を認識していた。じっさい、リストの作品は 1862 年以前には宗教的テーマを取り扱ったものは、聖歌のメロディーを拝借することはあっても調性音楽によって和声づけられていたのだが、1863 年以降は突如として教会旋法によって楽曲が構成されるようになるのである。リストは 1 つ目のオラトリオ「聖エリザベートの

伝説」を 1862 年に作っていて、これは確かに調性音楽で、当時から聴衆の評判も良かった。一方で 1866 年にいちおう完成した「キリスト」は、これまでのリストの音楽技術が全て集結し、その上に教会旋法を展開し、斬新であった。

まず、それぞれの楽章が聖書等の詩句による情景を描いているので、リストが確立した交響詩のコンセプトがそのまま受け継がれている。全体として教会旋法と聖歌のようなフレーズを用いた古風な性格を持ちながら、一方で半音階と全音階、転調、バーバリズムな打楽器を組み合わせた楽章を挿入するなどしていて、それが結果として教会旋法さえも新しい響きに導いている。

リストはベートーヴェンの 9 つの交響曲と、シューベルトの歌曲を積極的にピアノ編曲して演奏していた。年間 300 回、ヨーロッパ全土を郵便馬車で移動しながらリサイタルを行っていたリストがこれらの編曲を各地で披露したために今日の両作曲家の知名度と偉大な評価があるわけだが、同時にリスト本人も彼らの作曲技術を吸収していて、ベートーヴェンらしい楽器と楽器のメロディーの掛け合い、シューベルト的な単調と長調の切り返しは、「キリスト」の中でも見受けられる。ムジカ・ブダペスト社が出版している新フランツ・リストピアノ曲全集を見れば、リストが遺したピアノ独奏曲のうち半分が他の作曲家の楽曲の編曲作品である。リストは新ドイツ楽派に属する音楽家と言われることがあるが、全ての楽曲がそのカテゴリに当てはまるわけがなく、彼の音楽に国籍はない。「キリスト」ではオリエンタルな、無国籍な音世界を作り出している。

また、ロ短調ソナタを作曲する手前、リストはバッハのオルガン作品のピアノ編曲に力を注いでいる。これにより対位法をしっかり学んだのだろう。ロ短調ソナタ自体にも 3 楽章相当部分にフーガが出てくるが、「キリスト」でも序曲は教会旋法のフーガから始まり、合唱のパート旋律も緻密な対位法で構成している部分がある。第 2 部のフィナーレ「エルサレム入城」でキリストが人々から「ホサンナ！（お救い下さい）」の言葉とともに熱烈な歓迎を受けるシーンも非常によい出来映えのフーガである。

全く、すべてを注いだという作曲者の言葉は嘘偽りがなくて、そのおかげで聴くものに宗教的な体験を与えてくれるのが「キリスト」なのである。これ以降、リストの作品は前衛性を極めていくことになる。宗教音楽の改革が、宗教と何ら関わりのなさそうな印象派、近代の作品にも受け継がれて行くことは興味深い。

それはさておき、「キリスト」はサン＝シモン主義の実践であっただろうか。この点、サン＝シモン主義ではキリスト教のあらゆる教えは究極的には隣人愛（博愛）に収斂されるとしている。しかし、「キリスト」は約 3 時間の演奏時間のうち、3 分の 1

に相当する時間を「受胎告知」、「輝きの聖母は佇み」、「悲しみの聖母は佇み」という、聖母マリアの描写に配分している。受胎告知は福音書のエピソードであるが、後二者は聖書そのもののエピソードではない（伝統的にキリストを描く作品において挿入される楽章ではある）。慈愛のシンボルであるマリアの描写をわざわざ挿入している意図は、博愛のみを至上とするサン＝シモン主義とは、やはり異なるのである。これがリストの聖職者としてのサン＝シモン主義の修正であるといえまいか。親から愛される子供は大きくなってからも人を愛すことができるということは、虐待を反例として今日誰でも想像できる。慈愛が博愛を育てるのである。格差是正は事後的なものになってしまうことは上述したが、サン＝シモン主義に従って事後的になにか施しをするとしても、親の慈愛を受けることができないほどの経済状況では、博愛精神を重んじる社会は育めず、そもそもはじめから認めるべきではないのだという、そういう解釈ができそうなところである。

そして博愛によって洗練された産業者による民主的統合や王権との再契約によってカトリックの封建体制を否定する。この部分については、リストはサン＝シモン主義と合致していて、「キリスト」の初演はカトリック教会ではなくプロテスタント教会で行われたのである。こういう意味で、このオラトリオは音楽的成果だけでなく、思想的成果としてもリストの全てが凝縮した作品と言わざるを得ない。

しかし、残念ながら当時の聴衆の評価は芳しくない。近代化による社会生活水準の向上または機能不全に陥った格差是正といった状況で、宗教に対する関心そのものが低まってしまったことが要因の一つとして考えられるだろう。またサン＝シモン主義自身も 1860 年代には役目を終えつつあり、マルクスの思想が台頭してきていた。したがってサン＝シモン主義の総括が行われず、殆ど誰も、その修正の意義について理解をし得なかったということも考えられる。なんにせよ、リストの修正は、直接的には功を奏さなかったのである。

■慈愛の必要性

では、リストの考え方は全く無視されて良いものかと言われれば、それは違うだろう。それはリストの親族が証明している。

一人はフランツ・フォン・リスト（1851～1919）である。フランツ・リストの年下の叔父に、エデュアルト・リストという人物がいる。フランツ・リストは彼と真の兄弟のように深く親交があった。フランツ・フォン・リストはエデュアルト・リストの息子であり、つまりフランツ・リストとフランツ・フォン・リストは親子以上に年の

離れた従兄弟の関係にある。そのような者がヨーロッパ全土で人気の作曲家フランツ・リストの影響を全く受けていないとは考えがたい。

フランツ・フォン・リストは、刑法学において従来説に社会学的批判を加えた近代学派を提唱した。それまでの刑法学古典学派は、刑罰を課すことができる根拠を「罪に対する応報」と捉え、刑罰は純粋に罰（悪いことをしたから罰される）としての性格を有すると考える。一方、近代学派では「罪を犯した者の反社会的性格の厚生・社会危険の除去」を刑罰の根拠とし、罰は「罪人を厚生させるため」に与えられるものであると考える。つまり犯人から除去すべき問題点を洗い出すため、当人の社会的背景を古典学派よりも積極的に検討することになる。例えば、犯人に「幼少時代、貧困な家庭で両親からの愛情を受けられず、残忍な性格を有するに至った」というような背景があったとすれば、博愛と慈愛の循環関係が見出される。フランツ・フォン・リストは「最良の刑事政策は最良の社会政策である」という格言を遺しているが、この根底には個人が善良な人間として成長する家庭・社会を作らねばならないという意識が流れている。

そしてもう一人はリヒャルト・ワーグナー（1813～1883）の妻となったコージマ・リスト（1837～1930）である。コージマ・リストはフランツ・リストと前妻マリー・ダグーとの間に生まれた 2 人目の娘である（1 人目は娘ブランディーヌ、3 人目は息子ダニエルであるが、この二人は早逝してしまう）。

実のところ、フランツ・リストは良き父であるとは言えない人物であった。演奏旅行に忙しかった彼は娘たちを母アンナや家庭教師に預けて、殆ど会っていなかった。面会が 4 年ぶりとか 9 年ぶりということもザラで、12 歳のコージマがヨーロッパを駆け巡る父親に「次はいつお会いできるのか」と手紙を書くと、彼は「しばらくは難しい」というそっけない返事とともに、その手紙のスペルミスなどを添削して返送するという、あまりにも冷たい仕打ちをしてみせた。そのくせ、子どもたちが母親のもとを足繁く通うようになると、フランツは激怒し、その訪問を許していた母から娘二人を引き離し、後妻カロリーネの紹介した家庭教師のもとへ移した。フランツとマリー・ダグーは喧嘩ばかりしていた。どちらが子供の人生の手綱を持つべきかの闘争は、娘たちが成人する頃になっても続く。コージマは大人になってから日記でこのように振り返っている。

二十三日、木曜日（1871 年 3 月）、母を迎える準備に一日追われる。書類を整理し、父の古い手紙を読む。私には父も母もいなかったのだということを改めて思う。

R.ワーグナーだけが私にとってすべてだった。私に愛を与えてくれたただ一人のひとなのだ。（『コージマの日記』より）

コージマはなぜ、リヒャルト・ワーグナーを愛したのか。コージマもリヒャルトもどちらも結婚していたし、年も干支二回りも離れていた。一時は不倫関係で、誰にもその関係を知られてはならなかった（当時のヨーロッパでは、婚姻中の女性の不倫は重罪。リヒャルトはバイエルン国王ルドウィヒの御手元金から多大な資金援助を受けて音楽活動を行っていたため、市民やルドウィヒからの信頼を失えば万死に値することになる）。その危険を冒したのはなぜか。もちろん唯一無二の天才的な大作曲家であるリヒャルト・ワーグナーの聡明さ、センスに惹かれたということもあろう。リヒャルトが床上手で、体が悦んでしまったということもあろう。しかしそんなこもよりも、コージマは愛に飢えていたのである。住むところも、一緒に住む人間も、最初の夫ハンス・フォン・ビューローも、全てフランツ・リストが遠くから彼女に与え、縛り付けた。ビューローはコージマを、女性としてではなく師匠リストの娘として見ていただけで、愛を育んだわけではなかった。

コージマには、リヒャルトしかいなかったのである。だから、彼女は彼のすべてを受け入れた。そして、（コージマにも初めからその素養があったものの、）リヒャルトが主張する（政治的に合理性、道理のない）反ユダヤ思想までも、すんなりと受け入れてしまったのである。

「”リヒャルト・ワーグナー“は、リヒャルトとコージマの共作である」といわれるほど、コージマはリヒャルトの半身であった。リヒャルトが鉛筆で下書きした楽譜を、コージマが美しく清書をした。ルドウィヒ国王とリヒャルトが絶縁状態になりそうなときは仲立ちして、関係悪化を防ぎ、家計管理を行ってバイロイト劇場建設にまでこぎ着けた。コージマ・ワーグナーは、リヒャルト・ワーグナーが逝去した後も、バイロイト音楽祭（ワーグナーの作品を上映するためだけに作られたバイロイト劇場で開催される音楽祭）を主催し、リヒャルト・ワーグナーの名声を守り続けた。『ワーグナーの妻コジマ』（ジョージ・R・マレック＝伊藤欣二,中央公論社）にそのときのことがよく記されており、同時にユダヤ人に対する軽蔑の念も見て取れる。

そこでコジマは、バイロイトが単に「模範」公演を維持する役目に留まらず、そこが一大中心地、ワーグナーの教えが世界にむかって説かれるエルサレムとなるべきことを提言した。そのような企てには資金が―それも巨額の金が―必要だった

が、こういう際に彼女の夫が考えたように、コジマもまた、ドイツのみならず全世界がバイロイトを財政的に援助する義務を負っていると考えた。グレーゼンナップへの手紙にもある――「四千万――ドイツ国民に音楽祭を提供するには、最低これだけは要り用です。たぶんそのうちに、どこかの善人が寄附を申し出てくれるでしょう。たぶん、おのが民族の悪を償いたいと思うユダヤ人が」

コージマはある時期からリヒャルトが死ぬまでの間、日記をしたためていたが、総計 5000 ページの日記には、ほとんど 4 ページに 1 回（！）のペースでユダヤ批判が繰り広げられる。その彼女が、かのアドルフ・ヒトラーをワーグナー家の門をくぐることを許したとしてもごく自然なことである。その後の顛末は誰もが知るところであるが、ヒトラーはアーリア人としての民族意識をワーグナー音楽によって鼓舞し、ユダヤ人の殺戮を実行した。コージマ自身が何らの戦争犯罪をおかしたわけではないが、その反ユダヤ思想が幼少時代の乏しい父母愛経験に端を発しているのだとしたら、フランツ・リストにもナチスのユダヤ人迫害の責任が、間接的に幾ばくかあるとさえ言えるのかもしれない。皮肉なことに、リストの娘が、リストの考えの悪しき証人となってしまったのである。そうであれば、第二次大戦後を生きる人びとがリストを解釈する際には、慈愛の強調がいっそう重要である。

なお、ワーグナーの死後一時中断していたものの、バイロイト音楽祭はコージマの尽力により 1886 年に再開されており、この年リストはワーグナー亡き後の音楽祭の成功は自分にかかっていることを深く自覚し、体調が優れないのに出席し、そのまま死んでしまう。

■サン＝シモン主義の方法、リスト等による修正方法の現代への適用方法

以上見てきたように、市民革命以降のフランスは、哲学は自由主義、法の下の平等の実現をひたすらに夢見てきたけれど、一般社会が熱中していたサン＝シモン主義は必ずしもそれらの価値を最大限に高めようとしていたわけではなく、王権による産業者の地位の承認など、哲学とは趣旨の異なる打開策を画策していた。これはいわば方便であろう。

そういえば、そもそも方便という言葉が仏教用語であるように、思想を伝播しようとする場合は方便が使われることはよくあることである。例えば釈迦は悟りを開き仏陀になったが、その悟りは誰もが容易に理解し得るものではなく、言葉のみで伝えることもできないものだった。よって誰に説くこともなく涅槃に入る（死ぬ）というの

が、悟りとしては正しかろう。しかし仏陀は誤謬を含むことを識りながら、あえて比丘弟子に説法をし、それが口伝され、詩経となって広く伝播する事になった。そして、もっとも知恵のない人々に教えを広めるにあたっては、バカでもわかる極楽浄土や地獄といった概念を用いて、「どうやら悟りというものがあるらしい」という極めて初歩的な観念を育てることから始まる。しかし、仏陀の悟りがバラモン・カースト、輪廻転生を否定するために拓かれたものであることからすれば、浄土や地獄という存在は方便ではあるが、本来は否定されるものである。

このように社会全体の思想のアップデートのための方法論という見方をすれば、サン＝シモンのやり方は時代を超えて現代日本にも適用できるような不思議な魅力を持っている。そしてある一定の段階まで社会情勢が極まると、思想の最終地点との乖離が事実的にも論理的にも逆に強調されるようになって、修正されるか、新しい方便に移り変わっていく。また、その方便も一定の正しさを確立していくと、今度は本流の思想があたかも方便のように修正されていくこともあるかもしれない。修正はマルクスであれリストであれ、一人ひとりが自立した人間たりうる社会の実現に向けられている。ここから、現代社会がどのように進むべきかを考えるときには、その社会に適用され、また最終地点とされている哲学がどのようなものか、それとは別に社会の構成員はどのような考え方（常識観）を持っているかをそれぞれ分析した上で、後者によって社会が前者に接近する段階であるか、乖離する段階であるかを見極めることが重要であろう。そして、それが修正される際には、正しく哲学の方を向いているかを考えればよい。

日本国憲法は平等な国民主権を定立し、自然権思想の流れを汲んでいる。一方で、天皇を象徴として認めることはその例外を作り出し、矛盾しているように思われる。しかし、サン＝シモンの主張をなぞって、国民から権威を認められた天皇が、また国民の平等的価値を承認するのであれば、それは一つの完成された統治形態とも言える。そこで天皇を国家元首に据え、意見を表明し勅命を下せるような憲法の改正も、国民の社会理解の到達度いかんによってはあり得る話ではある。しかしその憲法改正という修正が、その他の改正項目などを勘案して、国民主権、平等から遠ざかるものであれば、それは否定せざるを得ないことは、至極当然である。

まぁ、他にも例を出して、自分なりの日本社会への批判、展望を紹介することもできるが、それはリストを現代から解釈する際の定まった視点を与えてしまう事になり、かえって望ましくないので、蛇尾のようであるが、このあたりで終了する。

⑦　バラード１番（ショパン）

只野歩（34 代）

（コメントなし）

白鳥の湖に基づく幻想曲より
⑧　「Dance of the Little Swans」、「The Main Theme」
（チャイコフスキー=ローゼンブラット）

熊倉大輔（34 代）

34 代の熊倉と申します。社会人になってもピアノから脱却できないでいます。寧ろ楽しくて仕方ないです笑

P 会関係の演奏会は久々なので、緊張で頭が真っ白になっていることと思います。面白い曲を紹介してもらったので、この機会に演奏させていただきますが、正直難し過ぎて大変なことになってます。興味持っていただけたら、まともな演奏が某動画投稿サイトにございますので検索してみて下さい。
社会人になってからは、毎回自分の中でテーマをもって演奏会に臨んでいますが、今回のテーマは音楽の型枠から外れた自由な演奏をすることです。今日弾く曲はそれにピッタリなものになっています。

〇Dance of the Little Swans
陰気な感じの序奏で始まりますが、すぐに頭おかしいワルツに変貌します。5 拍子でほぼ不協和音がなってますが、半分くらいは楽譜どおりの音だと思います。残り半分はお察し下さい。主旋律は割と有名かと思いますので、変拍子と不協和音でトリッキーに編曲された小さな白鳥たちの踊りを最後までお楽しみください。

〇The Main Theme
白鳥の湖と言えばこの曲って感じのやつです。原曲がいい感じに崩されててノリが良く感動的で聴きやすい曲となっています。(※上手い人の演奏の場合の感想です。お察し下さい。)

譜面もそんなに難しくなさそうだと思い、久々にコスパよさそうな曲見つけたと思いましたが、前曲を凌ぐ難易度でしたね。なので今回は「〇〇弾いてみた！！」くらいの演奏しかできませんが、一つ覚えて戴けると幸いです。

---

⑨ ソナチネ　第２楽章（ラヴェル）
　 樅の木（シベリウス）

高畑亮一（32 代）

32 代の高畑です。大学卒業後も細々とピアノを続けています。今は仕事の都合で茨城県に住んでいます。都道府県魅力度ランキングでは散々ですが、私の周りには美味しい野菜やら肉やらがたくさんで割と気に入っています。お勧めは干芋です。豆知識かは分かりませんが、干芋は表面が白いものよりも黄色やオレンジの方が新鮮です。平干し・丸干しなど種類もあり、そのままでも美味しいですが、火であぶるとなお美味しく、奥が深いですよ。干芋を食べながら書いていたらこんなことになってしまいました。何を書いてるんだという家族の視線が背中に刺さって痛いのでこの辺にしておこうと思います。今日はよろしくお願いします。

---

⑩ 百鬼夜行（城谷尚吾）
　 We Are the Champions（Freddie Mercury）

城谷尚吾（30 代）

皆様、お久しぶりです。30 代の城谷尚吾です。
ちなみに年齢も 30 歳です。

お元気でしょうか。私は体をいろいろ壊していますが元気です。
こうして、みんなとまたコンサートでお会いできることを嬉しく思います。
また、このような場を設けてくださったすべての皆様にお礼を申し上げます。

せっかくなので近況を書かせていただきます。
まず仕事ですが、相変わらず新潟で安全規格という技術の仕事をしています。
文系出身なので電気回路とか勉強が必要なものが多いですが、なかなか面白い仕事と思っているので頑張ろうと思います。しばらくは新潟にいると思います。

音楽ですが、相変わらずピアノ弾語りをライブハウスとかで行っています。
大きな出来事といえば、前回の Q 会コンサートで演奏した自分の曲がきっかけで、FM ラジオとテレビ番組に出演させて頂きました。(単発なのでレギュラーとかではないですが…)
テレビカメラの前で演奏するのは生まれて初めてでなかなか緊張しましたが、いい経験になりました。
悲しいかな、音楽で結果は出ておらず、周りの方の演奏に凹みまくる日々ですが、まあ一生続けたいなと思います。

なお、もはやライフワークと化した企画イベントがありますので、宣伝させていただきます。まさかの 19 回目です。
2018 年 12 月 1 日(土)、横浜関内の遊楽ブレイブバーで音楽イベントを開催します。
本日第 4 部のトップバッターで演奏する高橋一勝さんと二人で主催しております。
雰囲気は例会みたいな感じで、外部の方からもいろんな方が参加してくださいます。
P 会からは嶋田千恵さんや彦田和宏などが参加してくださったことがあります。
1940 年代だったか…に製造されたアップライトピアノもありますので、もしよかったら遊びに来てください。演奏したい方は事前連絡が必要ですが、大歓迎です。

では、本日の演奏曲について紹介します。

・百鬼夜行
お化けをテーマにして作った曲です。
百鬼夜行の怖さや不思議な感じ、あと日本の舞(?)をイメージし作りました。
かっこいいなと思ってもらえると、嬉しいです。
一応、歌詞を記載します。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
人気もなくなった夜の道　日が暮れてしまった夜の道
幾百もの鬼達が　我が物顔で練り歩く

ウラシマタロウもモモタロウもいない
念仏唱えて　さぁ逃げろォ

〇夢と現実の狭間でスキマ　こじ開けて現れる異形
ひび割れて崩れ去るジョーシキ　ヒトナラザルモノ　百鬼夜行

その姿はマボロシか　見えないフリをしているだけか
深々と底へ沈む夜　心の闇が鬼となる
嗚呼　草木も眠る丑三つ時に　この世の中で誰を頼ればいい?
体は凍る　心は溶ける　ワタシハヒトカ　ソレトモオニカ

鏡を見れば　そこに映るのは　誰かのフリした死んでいる目

空っぽの殻　狂々(くるくる)回る　来る　手酔い　足酔い　我酔いにけり

〇くりかえし

カタシハヤ　エカセニクリニ　タメルサケ　テエヒ　アシエヒ　ワレシコニケリ
光なき　アヤカシ世界　列なり行くは百鬼夜行
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
・We are the Champions
ご存知イギリスのロックバンド Queen の超有名曲です。
曲のテーマは「たとえどんなことがあっても、戦い続ける限りみんなは敗北者ではなくチャンピオンなのだ」というものです。
本日ここにいらっしゃる方々も、大なり小なり何かと戦って人生を生きていると思います。
このコメントを書いている時点ではまだ伴奏が完成していないのですが、曲のパワフルさを伝えられるように一生懸命歌いますので、宜しくお願いいたします。

本日は有難うございました!!

【第 3 部】　15:20 ~ 16:20

⑪ Mountain Top（RADWIMPS）
どこまでも君と（新田のん）

嶋田千恵（23 代）

こんにちは、23 代 OG の嶋田（旧姓：平片）です。
本日はお越し頂きありがとうございます。
現役時代は全ての定期演奏会にピアノ弾き語りで出演しておりました。（Ｐ会ギネス記録保持者かも？！）卒業して 10 数年経った今でも、Ｐ会で 4 年間活動した思い出はかけがえのない宝物です。今年もこうしてＯＢ演奏会に出演できることを嬉しく思います。これからのＰ会の更なる発展と現役・ＯＢ皆様のご活躍を願っています！

（1 曲目）RADWIMPS「Mountain Top」
　今年２月、友人の誘いで映画『空海－KU-KAI－美しき王妃の謎』を観た時に知った曲です。最初聴いた時てっきり海外のミュージシャンが歌っているのだと思ったのでエンドロールを見てぶったまげました。映画『君の名は。』の時と同様に 1 回聴いただけでハマり、家に帰ったらレコチョクで即買いました。
　この曲は壮大でありながらも、シンプルでストレートです。コード譜は初見で爪弾けるほどに、流れをつかむのは簡単でした。でも、この曲は実はとても難しいのです。音がシンプルだから間違えるとすぐにバレます。アルペジオは意外にも独特で、容易く歌とズレます（爆）カッコよく弾きたい！などと思って弾いた日には、全然うまくいきません orz この曲をしっかりと弾き語るには並々ならぬ集中力（＝悟り）が必要なのだと痛感しました。

空海になった気分で演奏したいと思います。
―　お師匠さん、弾いて参ります。　―

（2 曲目）新田のん「どこまでも君と」
　「新田のん」は私のステージネームです。千葉県のローカル線いすみ鉄道の新田野駅から名前をもらって付けました。年に 2 回ほど開かれる後輩主催のイベント

や、地元の音楽バー等で不定期にて（≒ごくたまに）演奏しています。この名前を見かけましたら、どうぞ宜しくお願い致します。
　「どこまでも君と」は新田野駅周辺の風景をイメージして作りました。昨年３月から１年間限定で新田野駅についていたネーミングライツ「ドコまでも君と」に感銘を受けて、このタイトルにしました。キャンペーン終了に伴いネーミングライツの看板は撤去されましたが、２つ名は私の歌で残しました…といったところですかね。

全然電車っぽくない歌ですが、いすみ鉄道は非電化路線だから大丈夫だ問題ない！w
冗談はさておき、ゆったりとした気持ちでお楽しみ頂ければ幸いです。

【歌詞】**********
いつだったろう　緑のじゅうたんを駆け回った　幼い日
小さな花をつんで　贈り物　あげたこと思い出した
そばに隣にいてくれるなら　他に何も言葉など要らない
青い青い空　風は軽やかに歌うよ　生きているんだ
遠い遠い未来　まぶしい日差し浴び　手を取り合って　どこまでも君と

静まり返るホーム　夕焼け色に染まる水面（みなも）
ぽつりぽつり　灯る明かり　道端の白い光
その中のどれか１つに　僕らの居場所が確かに　有る
まっすぐに伸びる　新田野のレールは今日も　輝いているんだ
あざやかな景色を　あるがままに窓から眺めて　いつまでも君と

そばに隣にいてくれるなら　僕らの居場所は　Ah…
青い青い空　風は軽やかに歌うよ　生きているんだ
遠い遠い未来　まぶしい日差し浴び　手を取り合って　どこまでも君と
****

以上です。ご清聴ありがとうござ「い鉄揚げ」でした！

⑫　幻想曲　ヘ短調　D.940（抜粋）（シューベルト）

勝又友季子（33 代）＆中島優人（34 代）

【急募】譜めくり大募集！

明るく楽しいコンビと、

あなたも譜めくりしてみませんか？？

★抜粋で繰り返しもないので安心！

★憧れのヘ短調をめくれるチャンス！？

★厳粛な中間部から大迫力のコーダまで！やりがいがあります。

★演奏者はロマン派の実績だけは多数！しっかりサポートします。

まずはお気軽にご連絡ください ♪

⑬　ポロネーズ第７番「幻想」Ｏｐ.61（ショパン）

日高裕一朗（36 代）

早大ピアノの会 36 代 OB の日高裕一朗と申します。この度はこのような演奏の機会を与えてくださりありがとうございます。現在、東京大学大学院にて物理学の勉強をしています。
本日演奏する「幻想ポロネーズ」。なぜこれを弾こうと思い立ったのか自分でもよく分かりません。ただ、弾きこんでいくほど色々と気付きを与えてくれるような、とても奥深い曲だと感じています。
ここ最近はまたちがう曲に取りかかろうとしていたりして、あまり真面目に練習できていないですが頑張ります。

⑭ 10の小品 Op. 12-7 より前奏曲「ハープ」（プロコフィエフ）
映像　第１集より「水の反映」（ドビュッシー）

鈴木博雄（18代）

今年はドビュッシー没後100年とのことですが、私がピアノの会の定期演奏会で初めて「水の反映」を弾いたのは、没後80年の頃になります。月日が経つのは早いものですが、今回弾く曲はいずれも当時、素晴らしい先輩方の演奏に憧れて練習を始めたものです。サークル仲間が奏でる色んな音楽から、沢山の刺激をもらえたあの４年間は、何年経っても色褪せない、かけがえのない経験でした。そんなピアノの会を連綿と繋いで下さった後輩から、本日このような素晴らしい機会をいただけたことに心からの感謝を込めて、演奏させていただきます。

⑮　ピアノ・ソナタ第２番　第１楽章（カプースチン）

山田翔平（32代）

皆さま、こんにちは。最近、職場の塾から現役中校生声優（現在は現役高校生）が誕生しました。昨年、2000人の中からオーディションでセンター役に選ばれました。まだデビュー1周年を迎えない現在、それでも全国ライブツアーという大きな舞台を控え、たぶん私なんぞの新卒時代よりもたくさん働いていることでしょう。全国アニメイトお渡し会行脚なんかもしたそうです。まだタマゴの時代から先にサインもらっておけばよかったなーと思っております。やっぱ20歳過ぎても養成所や下積みで地道に切磋琢磨するよりも、下手でもともと、大きく出て幸運の女神に微笑まれるようにした方が世の中成功するものですね。私はいったいどこで人生を間違えたやら……おっと申し遅れました、32代ＯＢの山田です、どうもよろしく。

実に３年ぶりで個人での演奏会出演となります。長かったね。その間には、友人の結婚式に呼ばれて演奏したり、（晒される）時代が追いつきトレンドの仲間入りをしたワセオケ元首席飯島氏の伴奏を１回だけやったり、南葛西のバーにてポンコツ演奏で拍手をもらったり、キチガイな編曲楽譜をニコニコとようつべにうｐしたり（幼女戦記エンディング・カプースチン風編曲が人気です。みんな再生してね！）、地味な活動はしてますね、わたし。やっぱりピアノはわたしの人生の一部ですね。

さてさて、今回はカプースチンのソナタ２番です。あれれー？最初は１番だったんじゃないのー？とエントリー中のプログラムをしっかり確認していた方はお気づきかもしれませんが、まあ別にいいじゃないか。人間だもの。少なくとも、カプースチンは人気でもソナタを 1 番以外で演奏した人ってＰ会の中ではゲキ少ないんじゃないでしょうかね。調べたら 12 番？があったような…なので、私にとっても皆様にとっても、めくるめくカプースチンソナタの新しいページを聴いていただこうと思ったわけです。

実際、カプ２はうぃき先生によると１番よりも代表曲とされ、海外での人気も２番の方が高いっぽいです。なぜかというと、この２番こそ、ペトロフ氏によって公式リサイタルに史上初めて取り上げられたカプースチン楽曲とされているからです。その時の様子はようつべにペトロフで検索すれば出てきます。なんと客席にカプースチン本人もいてカーテンコールに応えてます。ちなみに演奏はミス多めで、この音源がＣＤ化された際は、提示部の１回目がミス多すぎて、編集でリピート後の演奏がさも１回目かのように挿げ替えられました。さすがペトロフ氏、ベテランの成せる技ですね！クソが。

私の演奏もきっと、皆様の耳垢を大量発生させる作用が含まれるクソミソ演奏になると思われますので、上級者の皆様は脳内で戻るボタンを。耳垢が大量発生してもいいよ！という方はご視聴お願い致します。実際、曲はとても良いです。１番よりもスタンダードなソナタの形式をしています。℃ハデな提示部、反行形の主題労作・スウィングやブギ色の強い展開部、きらめく再現部など、めちゃくちゃ出来がいいです。けど４楽章、てめーはダメだ。アムランにでも弾いてもらえ（実際弾いてるけど）。

では皆さま、本番まであでゅー☆

【第 4 部】　16:35 ~ 17:25

⑯　good day　goodbye（いちかつ）
なんでもないや（RADWIMPS）

高橋一勝（29 代）

部活の顧問として舞台に立つことはありますが、一人でこんなでかい舞台に立つのは、大学時代ぶりだと思います。
歌えるのか、曲ができるのか不安ですが、がむばります。

⑰　禿山の一夜（ムソルグスキー）

（36 代）小金ゆい＆川島捺央

こんにちは、36 代の川島・小金です。
社会人一女がんばってます！ボーナスよこせ！

卒業してもピアノは続けたいという思いから
勢いでエントリーしてしまいましたが、
学生時代ほど時間の割けない中曲を仕上げることがどれほど大変かということを痛感しています。改めて先輩たちの偉大さを思い知りました…。

1 週間前に慌てて合わせを始めるのは現役時代から相変わらずですが、楽しんで弾ければと思います！
それではお聴きください、『池袋の一夜』

⑱　焔に向かって（スクリャービン）

川野史暁（27 代）

◆プロフィール◆
千葉県出身。H21 年政治経済学部卒（ピアノの会では 27 代）。学卒後は金融機関に勤務。仕事の転勤により福岡に長年住んでおりましたが、今春から東京へ戻ってまいりました。

ピアノは趣味でダラダラと弾き続けてかれこれ２０年以上。社会人になってからはピアノに触れる機会はめっきり減りましたが、それでもピアノは私の生活には欠かせないものです。

◆曲目解説など◆
スクリャービンは学生時代から聴き始め、社会人になってからは私にとって最も好きな作曲家の一人となっています。とりわけニーチェ哲学や神智学への傾倒を深めた後期にかけての作品群は、彼独自の神秘和音を多用するなど個性に溢れております。今回弾く曲は小品ではありますが、後期作品の魅力が凝縮されています。

詩曲「焔に向かって」Op72
1914 年に作曲された晩年の傑作。曲の冒頭に提示される動機が曲の最後まで継続されており、曲の後半では重音やトレモロによって強調されるなど、曲全体の構成が一つのクレッシェンドとなっています。その点ではラヴェルのボレロに通じるものがあると個人的に思っています。かのホロヴィッツによると、世界の終末を夢に見てこの曲を作曲したのだとか・・・。

◆おすすめ演奏◆
Youtube にアップロードされているホロヴィッツのライブ動画に衝撃を受けました。ホロヴィッツらしいですが、オリジナルに音を加えたりしており、演奏も悪魔的で言うことなしです（笑）
また、スクリャービンの娘婿のソフロニツキーの演奏も非常に迫力があって聴きごたえがあります。

---

⑲ ピアノ・ソナタ第１番　「ソナタ・ファンタジー」　Op. 39
（カプースチン）

（29 代）滝本辰作＆森田亮介＆佐藤みずほ＆茂木聖也

われわれ早大ピアノの会 29 代は、過激異端的集団である。そう、われわれが現役生だった 2008 年は、いったい誰がサークル会員なのかも曖昧であった。そのようなお花畑サークルを脱却するため、同志長井淳の指導のもと、集団バッシング、ネットストーキング、告げ口、悪口、欺罔、賄賂、責任転嫁、扇情、チェーンメール、

裏掲示板、mixi 荒らしなど、さまざまな手口を駆使して旧来のレジームの一切を排除し、熱狂的ポピュリズムに裏打ちされた偉大なサークル運営体制を確立したのであった。

しかし、われわれには、ピアノの会の組織を強化することにより、その規模によってサークル活動の活発化を図ることこそが会員のメリット、サークルの強みになるという確固たる信念があったのである。この崇高な理想のために、われわれは心を鬼にしてマキャベリストに徹したのである。

今でこそ、早大ピアノの会は安定したサークルになっているが、その背景にはこのように汚い仕事を引き受けたわれわれ 29 代がいた事を 1 秒たりとも忘れてはならないし、寝る直前 10 分間、起きた直後 10 分間それぞれ感謝を捧げなければならない。そして本来であれば、毎月 100,000 円をわれわれ 29 代に寄付しなければいけないのである。

そして、われわれ 29 代は合計 IQ9 億 2000 万ともいわれ、超絶過激スーパーハイパーエリート頭脳派残酷集団として当時恐れられていた（今では合計 IQ27 億に達しているという）。今回、カプースチンのソナタ・ファンタジーを演奏するにあたって、その宇宙一の残酷頭脳を総結集し、この楽曲の解釈について 6000 時間かけて議論した。主要な議論は「そもそもソナタ・ファンタジーとは一体何なのか」という問題である。これについて下記の通りに複数の意見をまとめたので、誰しもがこの意見を最低 5 回は読み、そして今夜寝る前に 30 分間、われわれ 29 代に感謝を捧げ、賛美し、50,000 円を 29 代に寄付するべきである。

■論点

ニコライ・カプースチンにおけるソナタ・ファンタジーとはどういう意味か。ソナタは提示部・展開部・再現部という基本構成が決定している一方、ファンタジーは形式や楽想にとらわれず自由な展開を特徴としており、相互に矛盾しているように見えることから問題となる。

A 説（純粋ソナタ説　瀧本野尻）

結論：ソナタである。

理由：自由な展開といえども音符として記譜された段階でファンタジー的自由性は失われ、ソナタ形式のみが残る。

批判：あえてソナタ・ファンタジーと名付けた理由を説明できない。クラシックにおける全ての幻想曲が無意味となる。

B 説（幻想風ソナタ説　従来の通説　森田）
結論：第 1 主題と第 2 主題が独立している点で幻想曲の要素が取り入れられているが、楽曲全体の形式はソナタである。
理由：クラシックとしての性格を重視。前時代の作曲家における幻想風ソナタ、ピアノ・ソナタ「幻想」などと統一的に解釈することが可能である。
批判：本作品において必ずしも第 1 主題と第 2 主題が独立しているとはいえないし、他のクラシック作曲家の通常のソナタであっても第 1 主題と第 2 主題が互いに独立している例は多く見受けられ、幻想曲の要素の全てを主題の独立性に求めるのは妥当でない。

C 説（ファンタジー説　有力説　佐藤）
結論：ソナタ形式の要素を取り入れたファンタジーである。
理由：本作品のジャズ的性格を強調すると、クラシックの中でも自由な形式であるファンタジーとして捉えるのが素直な解釈である。
批判：クラシック的理論の枠内にある自由とジャズの即興的自由は次元を異にするものであり、ファンタジーとして捉える必要があるのか疑問である。
反論：近代以降、クラシックの理論は対位法、和声、旋法等あらゆる分野で展開され、その自由度は即興的ジャズと同視し得る程に拡大した。またクラシックが一方的に接近しているのではなく、ジャズにおいても教会旋法が導入されるなど、互いに接近している。

D 説（新クラシック説　少数説　茂木）
結論：ソナタ形式であるが、それをジャズ・ファンタジーとして捉えることによりクラシック性を高めている。
理由：バッハ、モーツァルト、リスト等数々の著名な作曲家が即興演奏を得意としていたように、もともと西洋音楽界においては作曲者と奏者が同一人物でありクラシックにも即興性が認められるところ、本作品は単にクラシックの理論枠内にあるファンタジー形式として一定程度許されている自由にはとどまっておらず、むしろ

それをジャズによって根本的に超越しつつ、その即興性・自由さでクラシックの本質を取り戻していると言える。
批判：即興性を認めるとクラシックの有する再現芸術性が失われ、かえってクラシックの本質が害される。

以上。
（読んだ人は今夜寝る前に 30 分間、われわれ 29 代に感謝を捧げ、賛美し、50,000 円を 29 代に寄付するように。）

【第 5 部】　17:35 ~ 18:35

⑳　ピアノ・ソナタ第 3 番　イ短調　作品 28（プロコフィエフ）

佐久間文（34 代）

（コメントなし）

㉑　蘇州夜曲（服部良一＝Minako Kikuchi）
鏡より「鐘の谷」（ラヴェル）

重松和人（32 代）

『蘇州夜曲』
小学 4 年生の頃に CM で流れているのを聴いてすごく良い曲だと思っていたのですが、ずっと曲名が分からないままでした。しかし、約 2 年前ピアノバーで知り合いのピアニストの方が演奏したのをきっかけに初めて「蘇州夜曲」という曲なのだと知りました。

今回弾かせていただくのは　　さんが歌の伴奏用として YouTube にあげていたものを何も分からんまま勝手にアレンジしちまったものです。花散る感じに惹かれました。

ジャズ風ではありますが、アレンジはテキトーなのでどなたかお詳しい方、より良くアレンジしてください。

『鐘の谷』

この曲を作曲した当時のラヴェルは進行性失語症を患っており、僕の高校時代のアダ名は言語障害だったのでその気持ち良く分かるといった感じです。

㉒　舟歌（ショパン）

渡辺裕貴（33 代）

（コメントなし）

㉓　スラヴァ　Op. 11-6（ラフマニノフ）

彦田和宏（33 代）＆今喜多萌（34 代）

来週入籍します。
お互い独身最後の演奏ということで、一層頑張ります。

㉔　アレグロ・アパッショナート　Op. 70（サン＝サーンス）

天海才（30 代）

2012 年に文化構想学部を卒業しました、天海です。本日はご来場ありがとうございます。

卒業後は数年間、金融機関に勤めていました。今年の春からは IT 企業でコンサルタントとして、医療系の M＆A 業務を担当しています。
現役の頃は、演奏部長を務めさせていただきつつ、今思えば恐ろしいペースで、次から次へと曲に取り組んでいました。それだけ演奏の機会に恵まれ、かつ、練習しようと思わざるを得ない程、周りのレベルが高い環境だったということかと思います。

社会人なりたて頃はコンクールに出たりもしていましたが、ここ最近はロクに練習せずという状況です。そんな中、このような機会があると「せっかくだから出よう」という気持ちになりますし、それなりに練習をするようになります。練習するようになったのはここ１ヶ月程度の話ですが(笑)。

曲についてですが、はじめはシューマンのソナタ２番を弾こうかと思っていました。社会人１年目のときに弾いたことはあるのですが、練習する中でやはり向いていない気がしたので、急遽変更し、学生の頃よく弾いていた曲を弾きます。この曲に最初に取り組んだのはちょうど 10 年前…？意外と指は覚えているものですね。ただ、いろいろと衰えているので、昔のようなはつらつとした演奏は出来る気がしません。その分、良い意味で大人な演奏が出来れば良いのですが。がんばります。

最後になりますが、森田さん、この度は OB コンサートを主催いただき、ありがとうございます。年を重ねるほど、ご縁って大事だなーと感じます。今後もこういった機会を続けていけるよう、私も微力ながらお手伝いしていきたいです。OB・OG の皆さま、これからも宜しくお願いします。

㉕　伝説　S.175 第２番「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」（リスト）

岡田諒子（35 代）

『伝説』は、リストのキリスト教への信仰が深まっていく時期に作られたものです。リストは聖人の堅い信仰心に感銘を受け、アッシジのフランチェスコとパオラのフランチェスコという二人の聖人にまつわる伝説をそれぞれ音化しました。第２曲は、メッシーナ海峡に舟を出すことを拒否されたフランチェスコが、マントを海に広げてその上を渡ったという逸話に基づき、フランチェスコが波の上を渡っていく様子が描かれています。

わたしは社会人２年目で、現在鉄道会社に勤務しながらピアノを続けています。社会人とピアノの練習の両立は体力的につらいですが、今後もこのような機会で演奏を続けながら、技術を維持していけるように頑張りたいなと思います。

【第 6 部】　18:45 ~ 19:45

㉖　ピアノ・ソナタ　K333　第 1 楽章（モーツァルト）

中村建太（34 代）

こんにちは。34 代の中村建太です。
ピアノは就職してから触っていなかったのですが、今回の演奏会を機に再開しました。

拙い演奏ではありますが、よろしくお願いします。

㉗　ソナタ 3 番　Op. 46 より第 1 楽章（カバレフスキー）

森明史（32 代）

この度は当演奏会にお越しいただき有難う御座います。早大ピアノの会 32 代 OB の森明史です。
今回は、運動会でよく流れる「ギャロップ」の作曲家である、カバレフスキーのソナタを演奏いたします。
カバレフスキーは 1904 年、ロシア生まれの作曲家で、1987 年まで存命でした。意外と最近までいたんですね。ピアノ曲では子供向けが多いイメージでしょうか。
この時代のロシア出身の作曲家というとプロコフィエフやショスタコーヴィチが有名ですが、この 2 人に比べてカバレフスキーの楽曲はかなり「伝統的」で「平易」です。
ソ連に媚びていたと言ってもいいですね。ソ連の楽壇の大物であり、スターリン賞も受賞しています。
今回演奏するソナタ第 3 番(1946 年作曲)も、自分で弾いていて「いつの時代だよ！」と突っ込みをいれたくなる曲調です。後期ロマン派が強い感じと言いますか。
逆に言うと、耳馴染みの良いメロディーでちょっと派手っぽい感じもするので、そういう意味ではいい曲だと思います。

さて、社会人歴が長くなるにつれて演奏技量が落ちてきており絶望しますが、温かいお気持ちで聞いていただければ幸いです。

㉘　ピアノ・ソナタ第 3 番ヘ短調 Op. 14 より第 1 楽章（シューマン）

鈴木花実（34 代）

みなさまこんにちは。
34 代の鈴木です。
今回はこのような貴重な機会をいただき、ありがとうございます。
現在は某自動車メーカーで働き始めて 2 年目となります。
仕事が思いの外多忙でまとまってピアノを練習する時間が無く、練習不足ではありますが、精一杯演奏させていただきます、よろしくお願いいたします。

㉙　ピアノ・ソナタ第 31 番　Op. 110 より第 3 楽章（ベートーヴェン）

花崎祐（31 代）

大学院を 15 年に卒業後、細々とピアノを続けておりますが、こうして久々に人前で演奏する機会に恵まれ、大変嬉しく思います。学生時分からいつの日か弾きたいと思っていた曲に挑戦します。ベートーヴェンの楽曲自体殆ど弾いたことがなく、ましてやフーガのある曲に取り組むのも初めてです。拙い演奏ですが少しでもお楽しみ頂ければ幸いです。
ちなみに有名曲ゆえ YouTube にも多くの演奏が載っています。個人的なオススメはリヒテル(Sviatslav　Richter)の演奏です。

㉚　狂詩曲「スペイン」（シャブリエ）

齋藤まりの（35 代）

社会に出て 1 年半、早稲田を卒業したのがつい最近のことのようです。

狂詩曲「スペイン」は、シャブリエがフランス公務員を退職（音大には行かず、独学で作曲を勉強）し、2 年後にスペイン旅行へ行った際、現地の音楽に影響を受けて作曲したオーケストラ曲です。

明るく華やか、シャブリエらしい和声で、軽快に展開していきます。

平日は仕事、土日はピアノ…というわけでもなく、休日は旅行にダンスに時々ピアノ…という感じなので完全に練習不足ではありますが
社会人になってすぐに舞台で演奏できるなんて思ってもなかったので、今日はとても楽しみです。
このような場を設けていただき、会場に足を運んで下さり、本当にありがとうございました。

㉛　スケルツォ第 3 番　嬰ハ短調　op. 39（ショパン）

佐々木寛志（30 代）

ショパンが 29 歳の時の作品。

初めてこの曲に出会ったのは、私が高校 1 年生の頃。「ショパンは優雅でお洒落な曲ばかり書く人」という固定観念を持っていたものの、たまたまかけた CD でこの曲に出会い、全身に衝撃が走りました。

意味深で不気味なイントロに始まり、突然襲われるオクターブの嵐はロックさながら。かと思えば中間部で聖母マリアのような包容力・暖かさに溢れ、終盤はエネルギッシュで熱さ一杯に疾走していく、ハッキリいって多重人格のような曲。身体が弱いものの、時折気性の荒さを持ったショパンらしい曲の一つかもしれません。

実はこの曲、ショパンの弟子で、非常に大きな手をしていたアドルフ・グットマン氏に捧げられたと言われています。身体が弱く、手も小さい華奢だったショパンの、思い通りにならないやきもきする気持ちや抑えきれない憧れ・思いが詰まっていることでしょう。私も感情むき出しで、会場の皆さんがゾクゾクするような、心に残る演奏ができたら嬉しいです。どうぞお楽しみください。

早大ピアノの会 第２回 OB 演奏会
2018 年 10 月６日（土）
開場：12:40　開演：13:00　終演：20:00
場所：スペース Do（新大久保）

第１部　13:00 - 14:00

① **角田みなみ（33 代）**／夢、版画より第３曲「雨の庭」(ﾄﾞﾋﾞｭｯｼｰ)

② **高畑(関)麻莉恵（32 代）**／銀河巡礼第一集「北半球の星空」より 7 つの楽想『プレイアデス』第 1 曲、第 3 曲、第 4 曲、第 7 曲(ｼｻｽｸ)、月の光(ﾊﾟﾙﾑｸﾞﾚﾝ)

③ **船津理香（17 代）**／コンソレーション第３番(ﾘｽﾄ)

④ **加藤喜市(27 代)**／ピアノ・ソナタ第１番 H.350 第 1 楽章・第 3 楽章(ﾏﾙﾃｨﾇｰ)

⑤ **中野花恋（35 代）**／ソナタ第 15 番「田園」第 1 楽章・第 4 楽章(ﾍﾞｰﾄｰｳﾞｪﾝ)

第２部　14:10 - 15:10

⑥ **森田亮介（29 代）**／オラトリオ「キリスト」より「飼い葉桶の羊飼いの歌」、「輝きの聖母は佇み」の断片(ﾘｽﾄ)

⑦ **只野歩（34 代）**／バラード第 1 番(ｼｮﾊﾟﾝ)

⑧ **熊倉大輔（34 代）**／白鳥の湖に基づく幻想曲より「Dance of the Little Swans」、「The Main Theme」(ﾁｬｲｺﾌｽｷｰ/ﾛｰｾﾞﾝﾌﾞﾗｯﾄ)

⑨ **高畑亮一（32 代）**／ソナチネ　第 2 楽章(ﾗｳﾞｪﾙ)、樅の木(ｼﾍﾞﾘｳｽ)

⑩ **城谷尚吾（30 代）**／百鬼夜行(城谷尚吾)、We Are the Champions(Freddie Mercury)

第３部　15:20 - 16:20

⑪**嶋田千恵(23 代)**／Mountain Top(RADWIMPS)、どこまでも君と(新田のん)

⑫ **勝又友季子（33 代）&中島優人（34 代）**／幻想曲 ヘ短調 D 940(抜粋)(ｼｭｰﾍﾞﾙﾄ)

⑬ **日高裕一朗(36 代)**／ポロネーズ第 7 番「幻想」Op.61(ｼｮﾊﾟﾝ)

⑭ **鈴木博雄（18 代）**／10 の小品 Op.12-7 より前奏曲「ハープ」(ﾌﾟﾛｺﾌｨｴﾌ)、映像 第 1 集より「水の反映」(ﾄﾞﾋﾞｭｯｼｰ)

⑮ **山田翔平（32 代）**／ピアノ・ソナタ第 2 番 第 1 楽章(ｶﾌﾟｰｽﾁﾝ)

第４部　16:35 - 17:25

⑯ **高橋一勝（29 代）**／「good day / goodbye」(いちかつ)、なんでもないや(RADWIMPS)

⑰ **(36 代) 小金ゆい&川島捺央**／禿山の一夜(ﾑｿﾙｸﾞｽｷｰ)

⑱ **川野史暁（27 代）**／焔に向かって(ｽｸﾘｬｰﾋﾞﾝ)

⑲ **(29 代) 滝本辰作&森田亮介&佐藤みずほ&茂木聖也**／ピアノ・ソナタ第 1 番 「ソナタ・ファンタジー」 Op. 39(ｶﾌﾟｰｽﾁﾝ)

第５部　17:35 - 18:35

⑳ **佐久間文（34 代）**／ピアノ・ソナタ第 3 番 イ短調 作品 28(ﾌﾟﾛｺﾌｨｴﾌ)

㉑ **重松和人(32 代)**／蘇州夜曲(服部良一/Minako Kikuchi)、鏡より「鐘の谷」(ﾗｳﾞｪﾙ)

㉒ **渡辺裕貴（33 代）**／舟歌(ｼｮﾊﾟﾝ)

㉓ **彦田和宏（33 代）&今喜多萌（34 代）**／スラヴァ Op.11-6(ﾗﾌﾏﾆﾉﾌ)

㉔ **天海才（30 代）**／ アレグロ・アパッショナート Op.70(ｻﾝ=ｻｰﾝｽ)

㉕ **岡田諒子（35 代）**／伝説 S.175 第 2 番「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」(ﾘｽﾄ)

第６部　18:45 - 19:45

㉖ **中村建太（34 代）**／ピアノ・ソナタ K333 第 1 楽章(ﾓｰﾂｧﾙﾄ)

㉗ **森明史（32 代）**／ソナタ 3 番 Op.46 より第 1 楽章(ｶﾊﾞﾚﾌｽｷｰ)

㉘ **鈴木花実（34 代）**／ピアノ・ソナタ第 3 番ヘ短調 Op.14 より第 1 楽章(ｼｭｰﾏﾝ)

㉙ **花崎祐（31 代）**／ピアノ・ソナタ第 31 番 Op.110 より第 3 楽章(ﾍﾞｰﾄｰｳﾞｪﾝ)

㉚ **齋藤まりの（35 代）**／狂詩曲「スペイン」(ｼｬﾌﾞﾘｴ)

㉛ **佐々木寛志（30 代）**／スケルツォ第 3 番 嬰ハ短調 op.39(ｼｮﾊﾟﾝ)